

つつ

田中拓也

斜めに光が射す竹林のなかの道を歩いている。竹だから図形的なイメージを描きやすい点がポイントである。それでもイメージがやや具体性を欠いているために、人生を思わずてしまうところが残念。

大雪の雪融け残るきさらぎの社報に載れる懲戒解雇

倉石理恵

私は会社のことは不案内ながら、社報に懲戒解雇の告知が出るなんて、何年かに一回のことだろう。社内的ニュースの波紋が広がった日の背景を表現。これも人生の一こま。

クリップの形を指でなぞりいる言いたき事を我慢する日は

桑野智章

書類を手に持つていてる時に、上司に何か言われた場面。その場面のイメージを的確に表現した上句に注目。

冴えかへるあしたすずめが空に散り風の速さに雲はゆくなり

山本枝里子

俳句の季語をうまく使って、初春の自然をさらっと表現して印象深い一首に仕上げた。「冴えかへる」は余寒、

白きが上に冴え返る」（河東碧梧桐）、「冴えかへるものひとつに夜の鼻」（加藤楸邨）。

「三け月はそるぞ寒さは冴え返る」（一茶）、「鶴の羽や

寒の戻りの意の早春の季語。いくつもの名句を思い出す。

来つ

大口玲子

家族と私が重なる部分と重ならない部分。子供が小さい頃の母親の私の時間は、一日の大半が、子供の時間と重なる。ここは、家族と重なる時間から離れた時間に光りを当たた一首だが、結句「散るを見に来つ」にその時間のニュアンスが読める。

鼈鼠を野衾といふ里人と連れだち不動の森へと急ぐ

水本光

「里人」という言葉、そして「不動の森」という名前のせいもあるだろうか、日本むかし話の一場面のように思えるところがうれしい。ムササビもまた、今では昔話の中の動物のようにしか思えない。なお、第二句の「いふ」は「よぶ」だろう。

春の夜の卓子のかたへしづかなる人として立つ若き

ソムリエ 小川祐子

レトロな雰囲気が感じられるのは、「卓子」という古風な用語、「春の夜の」というはじまり方のため。レストランもまた、食事をしようとする人たちも、レトロな空気をまとっているように感じられるから不思議。

死の前の薄くらがりか紅梅も河津桜もさだかに見えぬ

久家基美

生をして死をうたう今月の一連中、ことに印象的な一首。死の手前には薄くらがりがあるという。その薄暗がりに咲く春の花々。その道は、死にちかづくほど暗さがますのだろうか。